疲れた女神

高岡 啓次郎

この四月に有島四郎が熱海市街からも近い海辺の断崖に建つ古い洋館を買ったのは一枚の絵がきっかけだった。画家で友人でもある高階康夫が描いた絵のモデルに心酔してしまったというのが建物を手に入れた理由なのだ。聞くとその女性は資産家の妻で、三年前に亡くなったという。アパレルの会社を息子にゆずってから金と時間に余裕があった有島が、七十歳になったのをしおに世俗から離れて生きたいという願望から別荘がわりに購入したのだった。

田園調布の五百坪の敷地に有島の自宅はあるのだが、そこは管理会社にまかせて、遠く離れた伊豆の新しい住まいは、今まで金儲けに邁進してきた人生に嫌気が差してしまった男には、自由と静かな優しい時間を取り戻すに最適ではないかと思った。新居に引越してくるにさいして、友人が何か記念になる祝いをやろうと言うから、即座にあげた希望の品物は洋館の住人だった夫人の肖像画だった。もちろんそれなりの金は払ったが、画家は自身でも気に入っていたとみえて、しぶしぶ有島に『疲れた女神』をゆずったのだった。

実業家として成功した有島は連れ添いを八年前に病気で失っていた。身の回りの世話をさせていたのは大沢タキという老婆だったが、ここに移転するタイミングに引退してもらった。ところが何日もしないうちに訪ねて来て、いきなり泣いて懇願し、私には身寄りもないし旦那様が下さったお金でホームに入る気にもなれない。もう給料はいらないからこのまま置いてくれないだろうか。目も鼻も悪いから旦那様が満足

する食事は作れないが簡単なものならできるし、家の掃除や庭の草むしりくらいはまだまだやれると言うのだった。三十年も仕えてくれた人でもあったからしぶしぶ首をたてにふった。

しかし料理をしてもらう気はしない。砂糖と塩は間違えるし、お皿からは汚れが落ちていないし、酢は多すぎて舌がしびれるし、そんなわけで最近は食べ残す方が多かった。情に流されてタキの願いを入れたが、厨房に入ってはほしくない。ここに来てからはしばらく自分でやっていたが、やはり栄養バランスが悪いせいか胃腸の調子がよくない。それにタキは、掃除はするにはするが細かい汚れは見えないようだった。せっかくの美しい洋館もあちこちに埃が溜まり、庭にしてもタキの体力では追いつかないとみえて雑草だらけになった。

窓ガラスは波しぶきが飛んでくるからさすがに有島や老婆の手には負えず定期的に業者を入れた。庭はかつての住人のおもかげはなく、鋳物フェンスに取り囲まれた敷地は殺風景なままだ。今のところ有島には具体的なビジョンはなかった。風の音や絶え間ない潮騒や潮の香りが都会から来た人間には新しいドラマの世界に入り込んだみたいな錯覚をもたらしてくれる。いや、それは錯覚ではない。現実にひとりの実業家はこのときから別の次元に足を踏み入れたと言っていい。

「家政婦をひとり雇おうと思う。タキさんひとりでは大変だ。新聞に募集広告を載せるから」

「いい人が来てくれたらいいですがね。もう少し私が若ければひとりで何とかなるんですが、仕方がありません。旦那様のお気に召すようになさって下さい。それにしても古い建物ですね。造りは立派ですけど、普通の住宅とは思えないほど太い柱が使われていますよ」

「ここはね。以前の持ち主が暮らす前はどこかの会社の保養を目的としたホテルだったというよ。だから壁も屋根も頑丈に作られているんだ」

「さようですか。広い庭もさぞかし綺麗だったのでしょうね。今はこのありさまだけど、新しい方が来てくれたら少しはよくなるでしょう」

「熱海市内にいる人なら車を運転して来られるし、給料も相場よりは少し高めにした。景気も冷え込んでいるから求人に応じる人は多いだろう」

ところが、一ヶ月が過ぎても反応がなかった。

「どうしてなのかしら」

タキが年寄りとは思えない口ぶりで首を傾ける。有島も気にはなっていたが、なるべく平然としたふうを装っていた。そのことを知人との会話で持ち出すと聴きたくない噂が入って来た。そのあたりは自殺の名所として知られているからだろうと言うのだった。とりわけ若い世代の人はＳＮＳで情報がすぐ手に入るので、尾ひれを付けて噂が拡散するというのだった。

「そんなバカなことがあるか。まあいいさ。まだ何とかなってるんだから」

そう答えて気長に待つことにした。
五月が終わろうとしていたときにやっと反応があった。電話もなく、いきなり訪ねてきたのが三島沙也加という三十代の女性だった。そのとき有島は待っていてよかったと思った。その美貌もさることながら話し方や挙措が上品で、育ちのよさが感じられる。幾つかの質問にもテキパキと答えるあたりは、それなりの教養を身につけているみたいだから即採用となった。
「でも住まいは伊東市にあるんですね。一時間以上はかかるでしょう。大丈夫かな」
「ええ、運転は得意なので平気です」
「仕事は厨房と家の中の清掃です。ここにいる大沢さんが何でも知っていますから聞いて、何か要望があれば言って下さい」
「とくにありませんが、私は少し呼吸器が弱いものですからマスクをしていることを許可してほしいのです」
「それはまったく問題ないですよ。今は花粉症の時期だし、潮風も影響があるでしょうから」
さっそく翌日から三島沙也加はやってきた。朝の八時から午後三時までの勤務となる。背が高く、きれいなプロポーションをしているのでスラックス姿がよく似合う。動きがきびきびしていて、初日から仕事をこなしていった。その飲み込みの速さはタキも驚くほどで、一を言えば十を知るという表現が大げさではない有能ぶりだった。廊下を忙しく動き回る姿を有島はよく目にしたが、顔立ちをよく見ることはできなかった。きれいな人ではあるが細かな目鼻立ちはよくわからない。それはマスクだけでなく、大きなフレームの少し色が入ったメガネをかけているせいもあるだろう。
「旦那様、あの人を雇って大成功ですね。あんな有能な家政婦は見たことがありません。家の中を歩いて気付かれたでしょう」
「実にきれいにしてくれるよね」
「そうなんです。私がやったあとも掃除してるから最初は嫌味かと思いましたが、びっくりするくらいゴミや埃を集めてしまうので私も脱帽です」
そう言ってタキは苦笑いする。
「あはは、よかったじゃないか。タキさんはもう無理して働くことはない。あの人にまかせてのんびりしていればいいじゃないか」
「そうはいきませんよ。私は体が動くかぎり働きます。それでご相談ですが、沙也加さんが庭の手入れもやらせてほしいと言うんです」
「へー、家事の他に庭までかい。大変だろう。やってくれるなら助かるさ。もちろん余分に金は払う」
「じゃあ、やってもらっていいですね」
「庭師をやとう必要がないならありがたいじゃないか。どうやらセンスがありそうな人だからまかせてみよう。好きなように庭を作ってみたらいい。費用は十分に出すから」

「分かりました。では明日でも伝えますね」
翌日の午後になると、さっそく沙也加が描いたという庭のデザインが有島の元に届いた。まるで以前から考えていたかのような見事な図だった。タキが言うには一時間くらいで書き上げたという。
「沙也加さんは本当に何でも知っていますよ。ここの地面は酸性土壌だから紫陽花を植えたら見事な青色になるはずだから庭全体にそれを植えたらいいと言うんです。南側の陽射しが強いところにはアーチをこしらえて四季咲きの薔薇を絡ませるのがいいそうです。庭に日陰を作るために風にそよぐ柳を三本ほど配置すると、芝生の上で旦那様が読書をしたりしてくつろげるだろうと言ってました」
「ほう、なかなかいいじゃないか。さっそく注文して植えさせなさい。植木屋との折衝もあの人にまかせたらいいよ。私は金だけ出す」
有島は愉快に笑った。確かに木陰で海を見ながら本を読むなんて素晴らしいと思えてくる。
こうして夏が来たころには見事な庭園が出来上がっていた。通りがかった人たちが思わず立ち止まって写真や動画を撮っていくほどで、有島は窓辺に立っては飽きもせずにながめたり、植えられた柳の木陰で本を開いたりした。有島が仕事中の家政婦に近づいて褒めたとき、三島沙也加は有島にこんな要望をした。
「お屋敷の家事にくわえて庭園の世話をするためには時間がたりません。このお屋敷の荷物部屋でもいいですから私を住み込みで雇ってはいただけないでしょうか」
「きみさえよければ私はかまわないよ。好きな部屋を使うといい。でもきみはまだ若い。町から離れた所に住み込むのはいろいろと不自由ではないだろうか。ここはこのとおり賑やかな街中とは違う。夜になると虫が鳴く声や波と風の音しかしないんだよ。寂しくはないかな。観光客が歩く場所からも距離があるから、めったに人は来ない。人寂しくならないかい？」
「私は静かな方が好きなんです。このお屋敷にいると気持がとても落ち着きます。伊東には帰りたくありません」
「そうかい。ではそうなさい。私もきみがいつも近くにいてくれるのは嬉しいよ。でもいいのかい。きみのご両親とかは何とおっしゃるか」
「私は自由な立場にいますから大丈夫です。いつでも、どこにでも行ける身なんですから」
「え？」
意味をはかりかねたが、それ以上聞くのは失礼に思えて言葉をつぐんだ。
「では、いつでも貴女が都合のいいときにいらっしゃい。ぼくは会社から離れて今までの人間関係を絶ってここに来たけれど、貴女がそばにいてくれるのは嬉しいよ」
それは本音だった。そのとき沙也加の顔がかすかに赤くなったことに有島は気付かなかった。

有島の日課は朝起きてすぐに寝室にある『疲れた女神』に向かっておはようと言い、夜に眠る前にはおやすみの挨拶をすることだった。高階康夫は風景画を専門にしていた画家で、人物を描くことはまれだったという。油彩でしっとりとした光沢がある画面は全体が暗い森を背景にしていて、芝生に足を投げ出している女性の年齢は四十歳前後に見える。落ち着いた表情の中に憂いをたたえており、黒目がちな大きな瞳と、口づけをせがんでいるみたいな唇が魅力的だった。黒いキャミソール姿で野外にいるのは不思議な雰囲気をかもし出しているが、伸びた腕のしなやかさと首筋の美しさは男としての有島を疼かせずにはおかなかった。

画面の森はすぐ近くにある林をデフォルメして神秘性を持たせたのだと画家は話していた。デッサンはおもに庭でしたというが、現実の風景とは違っているようだ。海がすぐそばなのにそれは画面に登場しない。しかし背景にある木々や葉が波うつように曲線を描いているのが秀逸で、見えない海を閉じ込めているかに見えた。

『疲れた女神』を見ていると、このモデルになった女のことをもっと詳しく知りたくなる。これまで画家の高階に聞いただけでも十分に興味をそそられたが、その人が住んでいた家まで買ってしまうなんて、普通なら頭がどうかしていると思われるかもしれない。実際に息子からはそれに近いことを言われた。話を聞いた何人もが似たようなことを口走った。会社を大きくすることしか関心がないと思われていた有島が、小説じみたロマンチストであったことに誰もが驚いていた。

しかし他人がどう思おうが関係ない。自分は余生をここですごすのだ。そうつぶやく有島の右手には一冊の本があった。それはユイスマンスの『さかしま』だった。耽美の世界に独りで埋没し、精神を病んでいく主人公デゼッサントになぜか惹かれるのを抑えられなかった。天気のいい日には庭に出て、柳の木陰で読書にふけった。

仕事は引退しても経済界の知人が連絡してくる。セミナーの講師にならないかとか、地元の経済団体の役員になってくれという話もくる。息子の経営に不満をもつ社内の重役たちも相談をもちかけてきたが、有島は極力そうした雑事には関わらなかったし、来客はよほどの用事でないかぎり断っていた。そうやって読書にふけり、ときおり窓から見える庭園の様子をうかがいながら時間を過ごす。麦わら帽子をかぶった三島沙也加が忙しく動き回っている様子を興味を持ってながめてもいた。

そんなときに茶をお盆に載せて老婆がやってくる。本を読んでいるときは話しかけてこないが、そうでもないときは気軽に声をかけてくる。

「旦那さま。いい人を雇ってよかったですね。沙也加さんは本当によく働く人で感心します。この屋敷のことを短い間によく覚えたと思いますよ。十二もある部屋の間取りから地下室にある道具のありかまで、実によく知っているし、三階に

ある書庫の本のありかまで頭にたたきこんでるんですから」
「そうだろう。あの人に読みたい本を言うと十分もしないうちに持ってきてくれるんだ。この屋敷を買うときは家具から書物にいたるまで前の持ち主が使っていたままに置いてあるからね。私でさえまだまだ分からないのだよ。地下室の道具なんか数回しか見たことがない。どうやって使うのか分からないものもある」
「そうなんです。このあいだ庭のタイルが割れているのを見つけた沙也加さんが地下室から見たこともない変な形をしたペンチみたいのを持って来たんです。何をするのかと思ったら、地下室に余分に保管していたタイルをその器具で切ってうまくはめていたんです。驚きました。あの子は大したものですよ。以前は何をしていた人なんでしょう。ここに入るときには何か言ってましたか」
「さる外資系の大手企業で社長の秘書をしていたというよ」
「へえ、そんな優秀な人がどうしてこんな所に」
「おいおいタキさんや。こんな所で悪かったな」
「あ、いえいえ、そういうつもりで言ったのではありません」
「では、どういうつもりだい」
有島が笑いながらつっこむと、大沢タキは有島のそばに腰かけ、背中を丸めて面白そうに話し出した。
「優秀なのは分かりますが、あの人はどこか変わった人ですね」
「変わっているって何がだね」
「よくは分かりませんが、何となくそう思うんです。このあいだこんなことがありました。昔この辺に住んでいたという老夫婦が息子さんの車に乗って通りかかったのですが、車から降りてじっと庭を見ていらしたんです。そしてつくづく懐かしそうに話しているのを耳にしたんですよ。たまげた！何もかもが以前のままだとおっしゃるんです。配置もデザインも同じだと。どうして昔の庭のことが分かったのでしょう」
「ほー、そうなのか。まあ偶然だろうが、紫陽花や薔薇がこの庭に似合っているのを見抜いたということかな。あるいは、誰かに昔のガーデンの様子を聞いたとも考えられる。ここに来る前に下調べをしたんだろう。あの人は頭の切れる人だ。タキさん、社長秘書という仕事は大変な能力を必要とするんだよ。まして外資系と言えば英語も堪能だろうし、社長のスケジュールを把握することに加えて、必要なコンタクトを取ったり会合の場所を設定してコーディネートしたりもするんだ。当然のこととして相手側の情報を下調べしておくのはお手の物なんだよ」
「そういうわけですか。何でまた、こんな辺鄙な所にあんな人が来てくれたのかしら。それと、驚いたことがもうひとつあるんです」
老婆は顔を紅潮させて声も大きくなってきた。
「タキさん興奮してるね。あはは、まあ落ち着いて話しなさ

い」
「このあいだ沙也加さんが図書室の隣にあるゲストルームに掃除で入っていったんですが、あの部屋には古いピアノがありますよね。以前の持ち主の方が置いていったのが。けっこう埃だらけでしたよ。それを沙也加さんがきれいに磨き上げて、ちょうど旦那様が定期検診で病院にいらしていたときですが、そこに腰かけて鍵盤を叩きはじめたんです。そのとき私は慌てて、勝手に触ったらまずいのではないかと言うと、沙也加さんは毅然として、このピアノが私を呼んでいるのですと言って素晴らしい演奏をなさったんです。たまげました。あの方はもしかしたらピアニストでもあるのではないでしょうか。音楽のことはわかりませんが、何とも言えないきれいな調べで、私もついうっとりしてしまったんです」
「ほう、あの人はピアノも弾けるのかい。器用な人だな。まあ、それだけの教養を身につけていたということだろう。いつでも自由に弾いてかまわないと言ってやりなさい。その方がピアノも幸せというものだよ。何なら調律師を呼んで見てもらうといい。そう話してやりなさい」
「旦那様が自分でおっしゃって下さいよ。あの人、どうしてかお茶や食事を運ぶときも私に頼むんです。意外に恥ずかしがり屋なのかしら。旦那様が嫌いなのかと聞いたら、頬を赤くして、けっしてそんなことはありませんと言ったんです」
「そうか、分かったよ。こんど私から言ってあげよう」
タキがいなくなってから有島は再び『さかしま』を読み進んだ。夕闇が訪れてカラスの群が窓の外を横切って行く。寝室に入って物思いにふけったり、本の続きに目をとおしたりした。そのあと突然訪問者があった。人を遠ざけているから、平気でそんなことができるのは息子の有島孝之くらいのものだ。タキもさすがに遠慮してくれとは言えない。オヤジはいるかと夜も遅い時間に愛用のランボルギーニでやってきた。車寄せの街灯の前でさえ鮮やかな緑色が毒々しい。ずかずかとリビングに入ってきてタキにオヤジを呼んで来てくれと命じた。寝てはいなかったが有島は渋面を作ってガウンをひっかけて出てきた。
「なんだ孝之、やぶからぼうに。もう寝る時間だぞ」
「オヤジさあ、明日の重役会に出てくれないか」
「何で引退した俺が出ないとならないんだ。もうすっかり経営からは足を洗ったんだぞ」
「それがさあ。鮫島も八神も、他の取締役を扇動して俺のやりかたに逆らうんだわ。矢吹商事の買収も段取りが進んでいるというのに公然と反対しやがる。あそこが手に入れば店舗数は倍になるんだよ。それにさあ、俺が選んだ役員たちをクソミソに言って社員たちに吹聴してるのさ。明日、俺の味方をしてひと言だけ喋ってほしいのさ」
「矢吹は売上を昔から大目に申告して銀行から借りまくる癖がある。不良資産を隠している可能性もあるから気をつけた方がいいぞ。それに、お前は古い役員をバシバシ切って、おまえの息がかかった人間にすげかえたらしいな。あまり強引

な人事をすると、会社を分裂させてしまうぞ」
「俺がやめさせた連中は頭が固いやつらばかりなのさ。今のＩＴ時代にパソコンもスマホもちゃんとあやつれない人間は時代遅れでだめなんだ」
孝之は口角に泡を溜めながら弁舌をぶったが、有島は首をたてにふらなかった。タキが出した茶に手もつけずに「オヤジは本当にわからずやだな。俺の身にもなってくれよ」と言い捨ててリビングを出て行った。玄関前でちょうど三島沙也加が通りかかったらしく二人が挨拶をかわしているのがリビングのスイングドアから見えた。孝之が有島の息子であるということを知ったからだろうか。直立不動の姿勢で車が見えなくなるまで見送っていた。そうした儀礼的なことへの丁重さは秘書時代につちかったものだろうと有島は思った。
孝之が帰ってから有島は不機嫌に寝室のドアを閉めて舌打ちした。自分は息子を甘やかしてしまったのだろうかと自問する。小さな洋品店を夫婦で営んでいて、子どもがなかなかできずに二人で仕事に打ち込んでいた。葛飾の小さな店だったが、あるとき店に来た占い師が、夫婦に子どもがいないことを見抜いて進言してくれた。日本中の名水を飲んで歩く旅に出なさいというのだ。あるとき仕事を一週間休んで実行してみたら妻は妊娠し、孝之をさずかったのだった。二人とも三十代のなかばになっていた。
洋品店で売り出したシャツがヒットして急速に大きくなった。子どもには何でもほしがる物を与え、一級の教育を受けさせ、好きなだけ外国で学ぶ費用を惜しまず、自分の会社に入れてからも下積みをあまりさせずに責任ある地位につけた。ＩＴに強い孝之は有島も知らない情報をつかんできては社内に導入しようとする。ときには奇抜ともいえるアイデアを出すが、たのもしく思うこともあれば、指導者として全体をまとめる力があるかは不安が残る。自分がいなくなった方が新しく生まれ変わる可能性もあるが、逆の結果を招くこともあるかもしれない。あとをまかせて引退したからには口をはさむつもりはないのだった。それにしても強引すぎる。有島は最近少しずつ増えてきたブランデーをグラスにそそぎ、漠然と湧きあがる胸のざわざわを消そうとした。
どうなろうと知ったことか。もはや自分の責任ではない。時間とともに気持も落ち着いてきた。とりとめもなく物思いにふける。金を稼ぐためにあくせくと考えていたときに比べて、自由に想いにふけることができるのは幸せなことだと思った。読みかけの本に栞を挟んで枕元にふせていたが、それを閉じて壁にかかった『疲れた女神』に向かっておやすみなさいと言った。
横になってから画家から聞いた話を思い出す。あれは去年の冬だった。年が明けて間もないころで、大学時代から友人だった高階康夫の家を訪ねたときだ。熱海で老舗の弁当屋を営む家の息子である高階は奥さんに店をまかせて画作に没頭していた。いい絵があるから見に来ないかと誘われたのだ。有島はちょうど経済団体の集まりが熱海であったから終了後

に寄ったわけだが、ついてすぐに画家はアトリエに有島を入れて絵を見せた。
「どうだ？　この作品をどう思う」
「ほう！　風景画ばかり描いているおまえにしては珍しいな。誰だい、この人は。実に魅力的な表情をしているな。年齢は三十歳くらいかな」
「佐伯有菜という名で、若く見えるが俺が描いたときは四十歳だった。もう十年近く前のことだ。石油会社の重役をしていた佐伯慎太郎から頼まれたんだ」
「佐伯慎太郎ったら大変な資産家だぞ。シェル石油の重役でありながら個人でも幾つか会社をやっているはずだ。もう八十くらいになるんじゃないか。その人の娘なのか？」
「いや、奥さんさ」
「えらく若い嫁さんをもらったんだな」
「秘書をしていた若い子を後妻に迎えたのさ。なんとも羨ましいかぎりだよ」
「なるほど、それで？」
「結婚十周年の祝いとして頼まれたんだ。あの絵の背景になっている森は伊豆にある自宅からすぐ近くにあった場所だ。夫人が好きな散歩コースだったらしい。そこに椅子をおいて描いたものだ。家にあった庭でも続きを描いた。旦那が言うには少しうつ病をわずらっていたらしい。何とか元気つけようとして絵を贈ることを考えたんだろうな。心を病んだ理由はよく分からないらしい。自分が仕事でほったらかしにしていたせいだろうとは言ってたが、実は違う理由だったんだ」
「ほう、何かわかったのかい？　佐伯夫人が心を病んだ原因が」
「あれは最後のときだった。通算して十回くらいは画作のために通ったんだが、夫人とはすっかり打ち解けた関係になっていた。俺も女房がいる身でありながら強く惹かれたのも事実だ。絵を描きながらの雑談は実に楽しかった。お互いの恋愛経験にまで話は及んだよ。俺が見事にふられた話をいくつもすると、珍しく夫人は声を出して笑ったんだ。ところがさ、そのあと考えこんで、急に泣き出した。最初は何かを思い出して涙ぐむ程度だったが、しまいには号泣して、くずおれてしまった。思わず俺は抱き起こしたよ」
「おいおい、まさかそのあと手を付けたんではないだろうな？」
「いやいや、そうはならないさ。そんな軽い人ではない。抱き起こしてまた椅子に座らせてから、夫人は打ち明けてくれた」
「何を聞いたんだ」
「口の硬い有島だから少し教えてやろう。実は自分は許されないことをしてしまったと言ったんだ。誰にも言えずに悩み続けていると」
「何だって？　それは興味をそそる話だな」
「夫には言わないでくれと釘を刺されたが、ようするに好きになったんだよ。旦那以外の男をさ。名前は明かさなかった

が、その人には奥さんも子どももいたらしい。どうにもならない関係で苦しくて苦しくて、罪悪感もつのり、眠れない日が続いて自分は変になってしまったと泣きながら話していた。それ以上は詳しく言わなかった。俺は何も言わずに絵を仕上げてきたのさ。事前に旦那から相応の金をもらっていたしね」

「ちょっと待ってくれ。その絵がどうしてまた高階の手元にあるんだ？　それは佐伯家にあるはずじゃないか」

「実は、三年前に夫人が亡くなったのさ。四十六歳の誕生日を迎えてすぐだったという。そのあと、しばらくして旦那から電話があったんだよ。毎日、あの絵を見るのが辛い。だから引き取ってもらえないかと言うんだ。お金はもちろん返してもらう必要はないとね。俺は喜んで承知したよ。憧れていた人の肖像だからな。人物画としても傑作だと思っている。俺がかつてない思い入れで完成させたものだ。引き取ってから書斎の壁にかけていたら女房のやつが嫉妬してさ。はずしてくれという。だからここのアトリエに持ってきたんだ。どうだ、この悲しげな顔を。俺が描いたときより表情が変わったようにさえ感じてしまう。オスカー・ワイルドの小説ではあるまいし、そんなことはないはずだが」

「それは残念だな。こんなに若くして亡くなったのか。病気か何かで死んだのかい？」

「そうではないんだ。道ならぬ恋におちいった佐伯夫人は相手の男と心中事件を起こしたんだよ。別荘近くの断崖から飛び降りたみたいだ。お互いの腕を縛って離れないようにしていたという」

「何だと？　それが死因なのか？」

「そのときは夫人だけが助かった。男は死んだよ。音大の講師をしていたピアノの先生だったという話だ。伊東在住のな」

「名前はわかるのか」

「ああ、俺も興味があるから調べたさ。城山弘という五十九歳の人だ。国際的なコンクールでも上位入賞したこともある。それがさ、どういうわけかおまえに似てるんだわ。見てみるか」

「えー、まさか」

「ほんとだって」

そう言って高階はスマホを検査して城山弘の写真を出した。それを見たとき有島はこんなに自分に似た人物がいたことに驚いた。

「まあ、世界には自分とそっくりな人間は最低三人はいるというじゃないか。少し前の有島とそっくりだろう」

「確かに似ている。髪型から、かけているノンフレームの眼鏡まで同じに見える」

「彼女は命をとりとめたものの、結局はどんどん弱っていき、一年後には帰らぬ人になった」

「悲痛な話だな。この絵の中にある佐伯夫人の憂いの意味が少しわかってきたよ。彼女は悩み続けて生きることに疲れた

のだな。きみが描いた絵の題名が適切だったというわけだ。しかも未来を予見していたとも言える」
「そういうことなるな。旦那の話では夫人はこの絵をたいそう気に入ってくれて、断崖から飛び降りた日にどうやら絵を持って行こうとしたらしいんだ。額縁から外して玄関のかまちに置いてあったという。でも何かの理由で持っていくのをやめたんだな。世話になった夫のことを考えたからかもしれない」
「ほう、この絵を道連れにしようとしたわけか」
「真実は闇の中だけどな」
　このあと有島は少なからず衝撃を受けて帰宅した。それからも何度か画家の家に出入りしたが、そのたびに有島は『疲れた女神』に引き寄せられた。じっと見つめていると声が聞こえてくる気さえした。そのたびに質問し、佐伯夫人について知りたくてたまらない衝動を抑えられなかった。
「有島はすっかり惚れてしまったようだな」
「初めてだよ。こんな二次元の世界にいる人に惹かれたのは。まるで生きているようじゃないか。おまえの風景画は何点か持っているが、これほどのものはない。ゆずってくれないか」
「いや、そうはいかん。俺もこの作品にはこだわりがある。それよりさ、そんなに興味があるなら彼女が気に入って暮らしていた別荘へ行ってみないかい。俺も画作で通った場所だ。今は売りに出されているはずだ。だがなかなか買い手がつかないみたいだ。俺に金があったら買いたいくらいの雰囲気がある屋敷だよ。家具から調度品までそっくり付いたままだ。ピアノもあるはずだ。そのうち見に行こう、ここからも遠くないし」
「売りに出されているのか？　ぜひ見せてくれ。今から行こう」
「おいおい、せっかちなやつだな。俺は日展に出す作品を描いてるところだぞ」
「そんなの夜にやればいいだろう。行こう、すぐに。また何枚か絵を買うからさ」
「わかったわかった。用意するよ」
　こうして急きたてるように車で走って見に来たのだった。海辺の道は目が覚めるような海の青さと、断崖がコントラストを見せている。目的の場所に着いたとき、有島は一目で気に入ってしまい、そのあとすぐに購入を決めた。管理会社が事前に屋敷のいたんだ部分の修理も終えていたし、それなりに清潔に保っていたのは有島にとって好都合だった。息子や親戚はそんな古い家を買ったらあとあと金がかかってしょうがないと言ったが耳を貸さなかった。伊豆の海と、断崖と、背後の森に囲まれて建つ洋館は今の有島にとって何よりも手に入れたいものだったのだ。
　翌朝早くに電話が入った。実は昨日も二回ほど来ていたのだ。副社長の八神からだ。仕方なくスマホの着信ボタンを押

した。用件は夜に行われる重役会のことだった。孝之とはまったく正反対の理由で夜の重役会に出て欲しいという。新社長が自分の意に沿わない人をどんどん降格させて、強引な人事を決行していることや、矢吹商事の買収に反対だという内容だった。有島はもはや経営には関わらないし、どちらの側にも立たないと言って電話を切った。しかし矢神が最後に指摘したことは気にはなった。有島が二十パーセントの株式を所有しているからには経営から無関係ではいられないはずだと言うのである。リビングのカウチに座りこんだまま、何とかしなければならないと思った。自分が会社の株を手放したら、その行方が今後の社内の経営権争いを左右することになる。世俗の煩いから離れたと思っていたが、こうして呼び戻されるのは不快でならなかった。

その日の夕暮れどき、早い夕食を終えた有島が薄暮の庭に咲く紫陽花を見ていたときピアノの調べが聴こえてきた。自由に弾いてかまわないと廊下ですれ違ったときに三島沙也加に伝えていたからだろう。それまでの心のざわめきが去って行くようだった。しばらく耳を傾ける。何とも哀愁にみちたメロディだ。それが有名なショパンのノクターンであることはすぐにわかった。有島は目を閉じて聴き入っていた。この屋敷に住んでピアノを弾いていた佐伯夫人のことが頭に浮かぶ。

耳をそば立てたまま寝室に入る。壁にかかっている絵をじっと見つめていると切なくなってきた。報われない恋に苦しんで死んでいった佐伯夫人の悲しみが目の前によみがえってくる。この品のいい顔立ちをした人の中に燃えたぎる情熱が秘められていたと思うと、相手の男が羨ましく思われた。生だけでなく、一緒に死をも分かち合うほどに深く結びついていたという二人に嫉妬した。自分も若いころは人並みに誰かを恋し、打ち明けられないまま時は流れ、やがて見合いで知り合った人を妻にした。生も死も分かち合うほどの恋愛はしたことがないことに気付くのだった。

やがて静寂が来て、本格的な夜が訪れる。断崖に叩きつける波音はときに建物をもゆらす。しかし一定のリズムで押し寄せる怒濤の響きは不快なものではなかった。それは有島の心臓の鼓動や呼吸のリズムと重なり合って別世界に誘いこむ作用をもたらしたと言っていい。薄目を開けて壁にかかった『疲れた女神』を見ていると、その中の女が浮遊して辺りを飛び交っているような気になるのだった。

再びかすかにピアノの調べが聴こえる。実際に三島沙也加が惹いているのか、夕暮れに耳にした音が幻聴としてよみがえっているのかは判然としなかった。幾つもの部屋の厚い壁に隔たっているから実際に弾いていたとしても音はかすかなものとなるだろう。それが心地いい。そんな日が何日も続き、どちらかといえば不眠になりがちな有島に安らぎと眠りが与えられた。現役時代に体調を崩してやめていた酒をベッドサイドにおいてたしなむ。持病の心臓病も最近は鎮まっていて、常用していた薬を忘れてしまうくらいだ。そうした時間が幸

せに感じられ、俗世界から離れている開放感にひたるのだった。酒の量は少しずつ増えていった。

酔った状態で眠りにつくことが習慣になってきた。そんな夜に有島を陶酔させるできごとが起きるのだが、本人はそれが現実か夢の中のことなのか判然としなくなる。夜中にうっすらと目を開けると、就寝灯のぼんやりとした明かりの中で女が近づいて来たのだ。それは明らかに住み込みで暮らしている三島沙也加に違いなかったが、呼吸器が弱いという理由でいつも離さないマスクをとり、サングラスもはずして何とも優しい目で有島を見つめているのだった。

「あ、きみは」

「しー、声を出さないで」

女は後ろに束ねていた髪をといた。黒々とした長い髪が胸まで垂れ下がる。朦朧とした意識の中で有島は沙也加の素顔を見て驚きを隠せない。絵の中にいるはずの佐伯夫人と瓜二つだったからだ。これは夢に相違ない。酔って幻覚を見ているのかもしれないと思う。だが思うように声も出ないし、体が硬直しているように思った。まもなく女は一枚ずつ自分の衣服を脱ぎ、有島のパジャマの前ボタンをひとつずつ外して手を差し入れ、そのまま抱きついてきた。何がなんだか分からない心理状態の中で有島は溺れ、陶酔していく自分を少し離れたところから見ている気がした。

朝に目覚めてもベッドが乱れている様子はない。窓が少し開いて夏の終わりの風が吹いてきた。カーテンがゆれて潮の香りもする。だから甘酸っぱい女の香りもないし、枕元に髪の毛が落ちているわけでもない。自分はパジャマを着たままだし、眠る前には寝室に鍵をかける習慣があるが、中から施錠されたままだった。部屋は二階だから窓からは出入りできない。少し開いているのは昨日自分で明けたような気もする。

酩酊のなごりをひきずったままふらふらと起き上がって窓辺に立った。変わらない景色が広がっている。樹木と断崖と、その向こうに見える海がかすかに霧につつまれて広がっていた。

「やっぱり夢だったのか。ずいぶんエロチックな内容だったな」

そう言って苦笑したが、体には余韻が残っていた。それは明らかに快楽の置き土産みたいなもので、夢の影響だと思えば説明はつく。だがこの日から有島は家政婦の素顔が見たくてたまらなくなった。髪をといてマスクとサングラスをはずした沙也加を想像してみる。すると確かに輪郭や目鼻立ちが絵の中にいる佐伯夫人に似ている気がするのだった。絵の前に立っていつも以上に凝視する。悲しげな表情は変わらないが、口もとがかすかにほころび、笑っているように見える。有島は眠気が去らない目をこすって何度も見つめては想いにふけるのだった。

もし、絵の中から抜け出てくれたなら今夜も来て欲しいと念じる。夜になるのが待ち遠しい。日中は家の中を珍しく歩きまわり、沙也加と何度もすれ違うようにした。そのたびに

笑みを返してくる家政婦を観察したのだが、どう考えても昨日の妖艶な女とは思えない。作業着を着て庭を走り回っているのを見ても、あれが夕べの快楽をもたらしてくれた女だとは信じられなかった。その夜は昨日を再現して早くからベッドに横になり、酒を飲んで酩酊した。やがてかすかにピアノの調べが聴こえてきて、いつの間にか女の柔肌にまみれた自分がいたのだった。まるで若いときの欲望のたぎりがよみがえったように、有島はめくるめく世界に溺れた。

そんな夜が何度か続き、有島はますます絵の中にいる女のことばかり考えるようになった。文字通り、一日中そればかり考えていたと言っても間違いではない。好きな読書からも遠ざかり、屋敷の近くの森を歩いたり、佐伯夫人が飛び降りたという場所を訪ねては想いにふけるのだった。高い場所から下を見下ろすと、はるか下方に黒々とした岩があり、絶え間なく白波が叩きつけては飛沫をまき散らし、あちこちでとぐろを巻いては海面に浮かぶ泡を呑み込んでいる。そんな様子をじっと見つめていると、どこかから声が聞こえて来て、その暗い淵に吸い込まれてしまいそうになるのだった。

夏の猛暑がやわらいで、秋の気配が漂ってきたころ、久しぶりに画家がひょっこりと立ち寄って様子を見に来た。日展が終わったあと各地の展覧会巡りをしてきたという。雑談がすんだあと高階康夫はリビングのソファにでっぷりと太った体をうずめて聞いてきた。

「すっかり落ち着いてるな。どうだい住み心地は」

「ああ、ここに来てよかったよ。静かな世界はいいものだ。風の音や波の砕けるときの振動なんかも、すべてが日ごとに違っていて、一瞬一瞬が微妙に、ときには劇的に変わっていく。同じことはひとつとしてないのだと気付くんだ。過ぎ去る時間というものが二度と戻って来ないのだとあらためて気付かされる。しばしば夢想して夢と現実のはざまを歩くが、結局のところ両者にそれほどの違いはなく、マクベスのセリフではないが、あらゆるものが幻のように思えてくる」

「ずいぶん哲学的になったじゃないか。いや、詩人になったと言ってもいいくらいだ。あれほど事業欲に燃えていた有島は別人になったな。でも少し痩せたように見える。ちゃんと食べているのか」

「それは大丈夫だ。新しく来た家政婦さんがすごく料理上手な人で、しっかりバランスのとれた食事をしているよ。それに、素晴らしいピアノの演奏家なんだ。ときどき屋敷内に流れてくる。ショパンやリストの作品はおろか難しいラフマニノフの曲ものにしている人だ。きみにも聴かせたいよ」

「へえ、じゃあ佐伯夫人が残したピアノを弾いているわけだ。残念ながら俺は夫人の演奏を聴いたことはないが、なかなかの腕前だったと言っていたやつがいた。そのときのピアノを弾いているわけか」

「そういうことだね。こんど夜に来るといい。きっと演奏を聴けるから」

そうさせてもらうと言って立ちあがり、壁の中央にかかっている『疲れた女神』をしばらくながめてから画家は帰ろうかなと言った。玄関前で家政婦の三島沙也加とすれ違ったとき、後ろをふり返ったまま立ちつくしたので有島は声をかけた。

「どうしたんだ」

「いま通って行ったのがピアノを弾く家政婦さんか？」

「そうだ。彼女だよ」

「気のせいかな。初めて会った気がしない」

玄関を出ながら車に乗り込むまで首を振っては何かを考えていた画家は、「まあ、偶然だろうけど」と言ってドアを閉めた。窓を開けたまま画家は庭を眺めまわし、ひと言つけ加えた。

「ここの庭を佐伯夫人がいたときと同じにしたのはどうしてだい？　それも有島が調べて再現したわけか」

「いや、違うよ。それも有能な家政婦さんがデザインを考えて植木屋に造園させたのさ。有能な人だから前の庭について調べていたのかもしれない」

「ほう！　いい人が来てくれてよかったじゃないか」

そう言って画家はハンドルに手をかけてアクセルをふんだ。

高階を見送ってから有島がふり返ると二階の窓辺に三島沙也加の姿が見えた。布を手にしてガラスをふいている。頭にはスカーフをかぶっていた。少し見つめていた有島はそのあとはっとした。沙也加のかぶっていたスカーフが観葉植物の枝か葉にひっかかって取れたのだが、そのあと後ろに束ねていた髪をおろし、もういちど縛り治してからスカーフをかぶった。ほんの少しの時間だが長い黒髪が胸まで垂れたのを見た。そのとき有島は部屋に戻ってからも考え続けた。

夜ごとに現れる女はやはり三島沙也加だろうか。すべての部屋の鍵のありかを大沢タキも家政婦も知っている。夜中に合い鍵を使い、戸を開けて入って来たとも考えられる。それにしてもマスクやサングラスをはずしたときの顔はまぎれもなく絵の中の佐伯夫人だった。そんなことはあり得ない。三年前に死んでいるのだからやはり現実とは思えない。たとえ夢の中の出来事であったとしても、あんな素晴らしい時間はないと思うのだった。

有島は待ち望む。もう部屋に鍵をかけることはしない。同じように酒を飲んで、遠くから聴こえるピアノの調べに耳を傾ける。睡魔が襲ってきて意識が朦朧としてきたころ、目の前に女は現れるのだった。快楽に酔いしれて深い眠りについたまま朝を迎える日々は十日ほど続いた。

ある朝、大沢タキが食事を運んで来たときに言った。

「旦那さまは最近ひどくお痩せになりましたね。どこかお体が悪いのではないでしょうか。医者に診てもらった方がいいと思います。変ですよ。お食事はいつも残らず食べていらしゃるのに痩せてくるなんて。激しい運動でもなさっているわけではあるまいし」

どきりとしたが、顔色を変えずに答える。

「このごろは日中かなり歩き回っているからね。森や海辺の岩場もなかなか体力を消耗する。海辺に降りる場所も見つけたよ。ときどき上り下りする。体重が減っているのはそのせいだろう。心配ないさ」
「そんならいいですけどね。沙也加さんに頼んで、もっとスタミナがつくものを食事に加えてもらいましょうか」
「いやいや、今のままで十分だよ。心配してくれてありがとう」
　そのとき廊下を三島沙也加が掃除道具を持って通りかかった。有島とも目が合ったが、どこか恥ずかしそうに視線をそらせた。微笑んだようにも思うのだが、マスクで隠されているから確かではない。そのとき有島の胸にあきらかなさざなみが立った。それはときめきと言ってもいい。ドアの外に出て、三島沙也加の後ろ姿を見つめていたのだが、そばにタキがいたことに気づいて部屋に戻った。行こうとした老婆を引き止めて聞いてみた。
「あの人はいつもマスクをしているが、タキさんは素顔を見たことがあるかね？」
「ありませんね。私も言ったことがあるんです。夏の暑い最中でもああしているものだから、熱中症になったら大変だからはずしたらいいよって。そうしたら沙也加さんは困った顔をして、打ち明けてくれたんです」
「打ち明けた？　何を」
「納得のいく理由があったんです。呼吸器が弱いというのは嘘だそうです。数年前にケガをして唇を切ったから跡があるんですって。前の仕事をやめたのもそれが理由だそうです。傷のある顔を見られたくなくて、食事も他の方とは一緒にとれないらしいです。私は若くはないけど女として気持は分かりますよ。旦那様には内緒にして下さいと言われましたから知らないふりをしていてほしいです」
「もちろんだよ。そうだったのか。ケガをしたのか。交通事故にでも遭ったのかな。わかったよ。無理にとらせる必要はない。私も聞かなかったことにする」
　タキが去ったあと有島は考えた。もしそうなら、夜中に現れるのは三島沙也加ではないということになる。では誰だ。最初のとき、あのサングラスとマスクをつけて目の前にいたのは沙也加のはずだ。しかしきれいな唇をしていた。あの日いらいマスクをして現れたことはなく、薄明かりの中で見えたのは絵の中の佐伯夫人の顔だった。どうなってるんだ。すべては幻覚だろうか。この近くの森には野生の大麻も生えているという噂を聞いた。このあたりに詳しいとすれば飲み物や料理に混ぜることだってできるのだ。なんのために。いや、あり得ない。あの快楽のすべてはやはり現実とは思えない。
　考えることに疲れ果てて、有島は広間にもかかわらずリビングのソファでうたた寝をした。このごろは疲れがはなはだしく、日に何回か睡魔に襲われる。元もとが夢見体質の有島だったが、白昼夢を見るようになったのも最近のことだった。夜中に足もとから何かの気配を感じて薄暗がりの中で目を開

けると、白い蛇が床をはって有島の足をはって上がってきた。恐怖をいだいたが、それとはうらはらに得も言われぬ快感が体中に走った。やがて蛇は女体となり、有島の上でのたうち回ってから消えて行った。

白昼夢から覚めたとき、さまざまな想いが有島の中で交錯した。寝室に行って、じっと『疲れた女神』を見つめてから画家に電話を入れた。確かめたいことがあったからだ。高階康夫は仲間のグループ展に出す作品を製作中だと言った。

「忙しいときにすまないね。変なことを聞くけどさ、きみが佐伯夫人の絵を描いたときは顔はきれいだったかい？　どこかに傷があるとかはなかったかな」

「傷なんかないさ。きれいな顔をしていたよ。絵のとおりだ。理想的な配置ではないかな。それがどうした」

「いや、ちと気になることがある」

「へー、何だろう」

そう言ったあと、画家は思い出したように話し出した。

「だけどさ、心中事件のあとはひどかったらしいぞ。これは旦那から聞いたんだが、命は助かったものの、顔じゅうにひどいケガを負って、とりわけ唇の上を大きく切って腫れが治るまでかなりかかったらしい。そりゃあそうだろう。あんな断崖から飛び降りたんだから。男は頭蓋骨陥没で即死だったという。目玉も飛び出て悲惨な死に顔だったという」

「え？」

絶句したまま有島は次の言葉が出なかった。

「気になることって何なんだ？」

「いや、いいんだ」

受話器をおいた有島は戦慄していた。

「まさか、まさか、いやあり得ない、いったいどうなっているんだ」

そのあと吐く息が荒くなり、咳が止まらなくなった。喘息に似た症状はそのあともずっと続き、有島はますますげっそりしていくのだった。

有島が出席を断った重役会は大変な混乱のうちに終わったようで、それは内紛が最高潮に向かう分岐点となった。水面下で株の争奪戦となり、当然ながら有島が持っていた二十パーセント株をめぐって綱引きが始まった。その種の電話がひっきりなしにくる。屋敷を訪ねたいという重役たちからの申し出もしつこいほどきた。息子はまたしても急に訪ねてきては自分にゆずってくれと頼む。しかし有島は重役たちの不満もよくわかるから首をたてにふらなかった。

関係者があまりにもうるさく言ってくるものだから、いっさい電話にも出ず、メールを開くことさえしなかった。有島はそれどころではなかったのだ。画家から聞き出して佐伯夫人の墓を見つけて、毎日のようにそこを訪ねたのもそのころだった。その頭の中は他のいっさいを締め出すほど『疲れた女神』の世界に有島は没頭していたのだった。そしてとうとうその日が来た。

その夜、有島は今日こそ謎を解いてやろうと意気込んでいた。日中に仮眠をとり、夜にベッドに横たわる前に酒を飲まずにいて寝たふりをした。部屋の鍵は開けてある。目は冴え冴えしていたが、あえて朦朧とした意識の中にいるような気分を演出したのだった。やはり女は現れた。薄明かり中で、白蛇のように白い肉体が滑り込んできて有島を包み込み、陶酔させた。意識がはっきりしているから快楽も最高レベルに達し、なんども頂点をきわめたあと、胸をおさえて苦しみながら息絶えたのだった。

翌日になって遺体を発見したのは大沢タキだった。警察の監察医も入り、心不全で亡くなったことがはっきりした。著名人でもあり、そのために大勢が屋敷を訪ねてきた。息子や親戚も来て遺品整理に入った。弁護士立ち合いのもとで細かく財産目録を作らねば争いのもとになる。大沢タキは雑事に追われて倒れてしまった。三島沙也加は屋敷から姿を消した。幾ら探しても部屋に痕跡すら見つけられなかったという。

画家が告別式のあと息子に近づいて頼んだのは『疲れた女神』を戻してほしいということだった。しかし、屋敷のどこを探しても絵は見つからなかった。空になった額縁だけが壁に掛かっていたから、中身はいなくなった家政婦が持ち去ったのではないかという噂もながれたが、解き明かされないままとなった。

それから一年ほどあとに息子はアパレル会社を分社化して有島ホールディングの社長に就任した。父親の株式を相続したから勢力争いは決着したのだった。同時に婚約を発表したわけだが、あとから知人をとおして写真を見せてもらった大沢タキは、息子の結婚相手がどことなく三島沙也加に似ているように思ったという。だが、病院で寝たきりになっている老人の言うことに耳を傾ける人はいなかった。

誰も住まなくなった屋敷は再び売りに出されたが、長い年月を経ても買い手はつかず、建物は荒れ果てるままとなった。今は熱海の錦ヶ浦を訪ねた人たちの間で心霊スポットとして写真がＳＮＳに投稿されているというが、筆者は見たいとは思わない。一枚の絵に魅了された男と、そのモデルになった女の怨念が今も断崖の下から声を上げて叫んでいるように思えてならないからである。

完